



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.30

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.30. 実践
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147109>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人ひと(ざいち)の、
知恵や生き方(ち)から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニューズレターNo.30 2011年4月

京都大学

学際融合教育研究推進センター・生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 旧乗船場

亀岡フィールドステーション

清滝川水運の足跡を求めて

亀岡FS 研究員 豊田知八

保津川の水運が歴史資料や写真等が豊富なのに比べ、支流の清滝川水運については殆ど資料等がなく、これまで紹介されることがなかった。清滝川の水量や形状から、木材輸送は丸太一本流しとされ、筏の存在自体も不明であった。今回、清滝川で筏流しの経験を持つ元筏士さんや舟運を知る元船頭さんなどからの聞き取り調査を実施し、清滝川水運の歴史の足跡をたどってみた。

渡邊幸雄氏(94)は元「清滝川の筏士」である。氏によると、清滝筏は明治時代に盛んとなり、清滝集落の上流八丁山から流された。主に清滝の住民が組^[1]をつくり携わった。午前中に筏を組み、午後から出発、夕方嵐山に着く行程だった。組み手は5人。乗り組は清滝川では5人、保津川本流に合流後は2人で嵐山へ下った^[2]。構造は、13連で丸太の先端部に穴を開けて繋ぐ「目筏」であったが、固定力の必要なハナ(1連)とワキ(2連)にはカスガイを使用した。材は杉、ヒノキ、松。常水量が少ない条件を克服するため、清滝川では「仕留め」という人工堰を造り、地水を溜め、筏流しに必要な水量を確保した。人力で堰止め板を抜き、筏を一時水に寄せ流していく操縦法が特徴だった。仕留めは兩岸の袖を石積み(昔は木工)し、筏の通過する中央部は2本の丸太を並行に渡し、間に堰板を差し込む構造であった。堰板は、丈6尺、横幅5寸、厚み1寸の杉板20枚で、水圧を軽減するため、板と板の隙間が2分程あった。板抜きは2人で行った。板を上流へ押し倒しながら水圧を逃がし、一気に手前へ引き抜き、側らに重ね置いた。抜き手は堰下を通過する筏のハナに飛び乗った。板抜きには、水中から素早く抜く技術が求められた。堰に川水を溜める際は清滝発電所^[3]の送水を30分間止めたという。

清滝川の舟運については、流路の蛇行が鋭く、大小の岩がせり出す形状や常水量の少なさから「操船

は不可能」とみられ、これまでは舟運の存在そのものを否定する向きが多かった。調査を進めるうちに、舟運について知る嵐山通船の元船頭・早田昭三氏(84)と清滝の元料理人・豊田三郎氏(94)の二人から証言を得ることができた。早田氏によると、昭和4年の愛宕山鉄道^[4]開通により、清滝に大勢の観光客で訪れたことを受け、嵐山の観光船『嵐峡下り』の船を、支流清滝川の清滝集落畔まで引き入れた。また、豊田氏は、「ますや、かぎや^[5]といった清滝の旅館がそれぞれ一艘ずつ所有し、『金鈴峡下り』という名前で、客の帰路に船を利用していた」という。船頭は清滝の住民であった。これらの証言を裏付ける「愛宕山観光絵葉書写真」(昭和5年発行)が見つかった。写真には、全長12mほどの保津川下り級の杉板木造船と、二人の船頭が舳先で棹を差している姿が写っていることから、狭くて浅い清滝川では、櫂が不要だったことがわかる。

今回の調査で筏と舟運の存在が初めて明らかになったことは、保津川水運の歴史にとっても大きな収穫であり、今後の研究資料としても貴重なものになると思われる。今後、さらに具体的な構造や操船方法等についての検証をしていきたい。



清滝の象徴・渡猿橋の下を
流れる観光船

[1] 構成員は家族組と友人・仲間組とがあった。

[2] 流路が複雑な清滝川の操船は5人の筏士が必要。川幅が広い保津川からは2人で足りる。

[3] 明治37年建設の水力発電所。京都電燈(株)から現在は関西電力の管理。愛宕山頂の常夜灯にも利用。

[4] 昭和4年に嵐山電車「嵐山駅」から「清滝」まで平坦線、清滝から愛宕山山頂まで鋼索線。昭和19年廃業。

[5] 清滝の料亭旅館。ともに江戸時代創業で、「かぎや」は平成元年に廃業。「ますや」は現在も営業している。

ナレズシの本当の味は？

守山 FS 研究員 嶋田 奈穂子

「強烈で、食えなかった」

3月4日に守山市で行われた地域づくりフォーラムには、福島県立博物館の赤坂憲雄先生にお越しいただいた。これに先立って、昨年10月、赤坂先生を訪問し、お話する機会があった。話題がフナズシになったとき「先日、フナズシを頂きました。匂いが強烈で、とても食えなかったです」という赤坂先生の言葉に、ひょっとしたら・・・と考えることがあった。赤坂先生が召し上がったフナズシは、琵琶湖で育ったフナで作ったものではないのかもしれない、ということである。

フナはフナでも、違うフナ

琵琶湖であっても四国のため池であっても、中国や韓国であっても、泳いでいる時は同じフナである。しかし、ウロコや内臓を除かれ、塩に漬けられて脱水され、飯に漬けられて発酵した後は、全く別物になってしまう。見た目は変わらないが、においが全く異なるのである。あまりの違いに首を傾げなくなるくらいだが、琵琶湖以外で育ったフナのフナズシは圧倒的に臭い。生臭い。この差が生まれる理由は、明らかになっていない。

ただ、市場に出回るフナズシの原料は、多くが琵琶湖以外で育ったフナである。業者は味や香りの欠点を知ってはいても、需要にこたえるために琵琶湖産以外のフナを使わざるを得ないのが現状である。このため、フナズシを購入する人の多くは、琵琶湖産のフナではないフナズシを食べることになる。赤坂先生もその一人だったのではないかと、私は思っている。問題は「初めて食べるフナズシが、琵琶湖産ではなかったとき」なのだ。

フナズシは“やっぱり”臭い??

滋賀県の伝統食、名産として有名なフナズシだけに、食べたことのない人でも「臭い」という先入観をもっているようである。琵琶湖産のフナを使ったフナズシは、「臭み」というより「香り」といったニュアンスの風味があり、決して生臭いということはない。しかし、生まれて初めて食べるのが琵琶湖産以外のフナのフナズシであつたら、その生臭さをフナズシの風味だと勘違いするだろう。そして、ああ、やっぱりフナズシは臭いのだ、と感想を言って箸を置いてしまうにちがいない。こうして不幸な誤解が

生まれるのである。

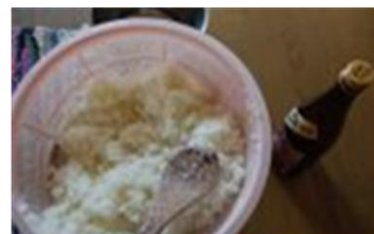
うまい！

私はどうしても、赤坂先生に琵琶湖産のフナのフナズシを食べてもらいたかった。フナにかかわらず、琵琶湖で育った魚のナレズシを食べてもらいたかったのである。それが叶ったのが、3月4日のフォーラムのあとだった。昨年5月に漬けたフナ、カマツカ、ニゴイを食べていただいたのである。うまい！と言ってもらえた。箸を置くことなく次々に食べてもらえたし、誤解も解けたようである。いつもお世話になっている琵琶湖に少し報えた気がした。

異邦人に罪はない

そのナレズシをつつきながら、赤坂先生と話した。当日のシンポジウムのテーマのひとつが「故郷と異郷」だった。その中で、故郷を離れて生活する者、つまり「異邦人」について、さかんに議論がされていた。それに例えて、私は琵琶湖産以外のフナを「まるで異邦人です」と言った。すると赤坂先生は、「異邦人を悪く言わないで。異邦人に罪はないよ」とたしなめられた。そうだった。どこで育ったにしても、フナに罪はない。食に関して地産地消、安心安全と叫びながらも、「名産」となると見境なく求めてしまう消費者のふがいなさが罪なのである。

どれほど多くの人が、琵琶湖産以外のフナのフナズシを食べて、それがフナズシの味だと誤解しているのだろうか。それを解いていくことが、琵琶湖の魚の資源としての価値を高め、そこから環境・水質や文化・漁業への理解につながるのだと、あらためて思った。



写真は昨年5月、塩から飯への漬け換え

山野の火入れを平場に活かす ―ハタケとネコブー (その2)

朽木 FS 研究員 今北哲也

畠づくりの壁

1月号で触れたように、稼ぎ頭の紅かぶは出荷の品目から消えてしまった。根こぶ病に頭を引っ叩かれ、「田んぼとちごうて畑っちゅうのは難しんやなあ」と思い知らされた。「畠百姓はまだまだや、連作障害(土壌病害)を乗り越えられんのやからな」。

長いブランクを経た今、焼畑を手本にもう一度畠のかぶづくりを試みることにした。

火入れの紅かぶに会う～温海から河内、余呉へ

『北国の野菜風土誌』青葉高著(1976)に出会い、火入れ跡に播くかぶのことを知る。1979年頃、温海(あつみ)かぶの産地、山形の温海町へ出かけた。根こぶ病に遭う前の時代である。温海から数年余り、福井は足羽川源流の村で河内かぶに出会う。紅かぶを断念した頃である。《福井焼畑の会》の仲間に入れてもらい河内には10年ばかり通うことになった。2005年、日野菜かぶ発祥の地鎌掛(かがけ)での休耕田火入れを皮切りに活動を始め、余呉の焼畑かぶに出会う。

どの地でも、焼畑で育ったかぶは草姿たのもしくネコブと無縁であった。が、在来種であろうと畠でつくると味が落ち、病害に遭ったりするということが同時に見聞できた。

焼畑を手本に畠づくり～畝焼きの試み

一昨年、畠の紅かぶを再開した。圃場は元々は田んぼである。連作障害をどう防ぐか。焼畑の野菜達を手本にしたい。ならば単純に、焼畑を真似て畠を焼こう。昨年の秋である。焼いた畝に余呉で育った安曇川在来の万木(ゆるぎ)かぶを種採り用に移植した(写真)。

畝に据えたドラム缶に竹の束を突っ込む。傍の畝にまとめた干し草を隙間に詰め、焚き付けにも使った。日没前には着火し、夜に見回り朝まで放置というふうに10回近く繰り返した。燃え尽きる時間、土の焼け具合、消し炭の出来具合を観てみた。燃材は竹なので間伐材より手軽である。村の年配者でも

菜園通いの街の人でも取り組める。土が焼け、消し炭・灰ができる。煙と竹が爆ぜる音でたまには獣が嫌がるといったささやかな愉しみもある。

しかし、こんなに簡単なことで根こぶ病菌の密度が抑制されるだろうか。火入れと作物の関係では、土中の窒素分が根から吸収され易い形に変化したり、土の構造がよくなったり、焼け跡の草木灰がカリ肥料やミネラル補給や発芽揃いに一役買っていたりと、焼土効果が認められている。それでは、休閑期間と作物の関係はどうなのか。サイクルが短くなればなるほど作柄は悪くなり、おまけに雑草にも悩まされてしまう。長くなれば東アジアの湿った風土で、草山はたいがい木山に遷移し、土の微生物相も多様になり豊かな土壌環境に近づくのではないだろうか。20年も経てば有機物の量も十分増えて炎焼カロリーも高くなる。

これからも、畠のかぶづくりや山野への火入れの自らの体験や、伝承されてきた各地の経験等をもとに、畝焼きの機器を改良しながら、畝焼きと作物の出来具合を検証し、石油依存を減らすネコブ対処法をさぐっていききたい。



(写真) 種採り用の万木かぶを焼き畠に移植

(註)

・根こぶ病菌 糸状菌(かび)の仲間 学名 *Plasmodiophora brassicae*。土とアブラナ科植物の中でくらす。根部にこぶができると植物は萎れあるいは枯死に至る。こぶから休眠胞子(ネコブカビ)が放出され、土、水、風で広範囲に伝播する。水分が多く、酸性が強い日本の土壌環境では蔓延しやすい。0.002mmのネコブカビが土1gあたり1万個以上で発病するとされる。〔「根こぶ病」農文協 2006年刊より抜粋〕

・ハタケ 焼畑のかぶら、と平場(常畑)のかぶらの違いを念頭に置いた本稿では畑と畠を使い分けた。また総称することばとしてサブタイトルには便宜上ハタケを用いた。

■第34回 定例研究会

1. 日時：平成23年4月22日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

3. 発表者： 今北哲也、黒田末寿、鈴木怜治（朽木FS）**発表タイトル： 焼畑で「くらしの森」づくりを目指す*****参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室****（担当：矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。****アジアの開発途上国に学ぶ計画停電の積極的
活用のすすめ****安藤和雄（東南アジア研究所）**

計画停電と聞いた時、すぐに思い浮んだのが、日常化しているバングラデシュとネパールでの計画停電のことだった。バングラデシュやネパールでは、load shedding という英語が日常的に計画停電の意味で使われている。3年前にでかけたカトマンズのホテルでは、午前と午後4時間ずつのみ通電され16時間の停電があったと記憶している。バングラデシュでも一日当たり数時間単位の計画停電は日常的だ^{（注1）}。

現在、バングラデシュでは米の生産量は、2月～4月にかけて本田で栽培される乾季灌漑稲作である IRRI-BORO 稲作に依存し、もっとも大量の電気がこの時期に消費されている。これは灌漑のために1970年代以降、地下水を利用する浅管井戸や深管井戸が急速に全国に広がったことによる。当初、管井戸は軽油エンジンのポンプであったが、電気代が安いということで、エンジンが電気モーターにかわった。2月ともなれば、田植え後の一面の水田に点々と管井戸の掘っ立て小屋が現れ、ポンプの口から勢よく水がでていく風景が氾濫原の村々に出現する。NGOであるJRDSの事務所があるドッキンチャムリア村界隈では、節電のためにと家庭用電気が優先されるために夕方5時から夜11の間は、政府により管井戸を使うことが禁止されているという。各家々はブロック毎に分けられ、乾季には一日の総停電時間6時間を2～3時間間隔で1時間行う計画停電が実施される。工場地域では朝7時～午後5時の間に2時間毎に1時間の計画停電が実施されるが、夜は除外されているらしい。雨季は川からの氾濫水や降雨などの天水で稲作が行われるので灌漑ポンプは使用されず、一日の停電時間は3時間ほどとなる。どこのブロックがいつ計画停電されるかについては、知りたい人が自ら電力事務所に電話で尋ねることが多いようだ。日常化した計画停電の問題を解決するためにIPS（Instant Power Supply）と呼ばれる蓄電システムが家々に普及しつつある。通電時に充電し、停電時にそれを使用する。インターネットで検索してみると^{（注2）}、もっとも安価なものは、150w、12Vの容量で価格は11,765TK（13,161円2011年4月24日）、蛍光灯1本（恐らく40w）と天井吊下げ型の扇風機1台が使える。もっとも高価なものは、800w、12vの容量で、27,945TK（31,262円）で、蛍光灯4本、吊下げ型扇風機4台、テレビ1台（もしくは冷蔵庫など）が使える。このホームペ

ージには掲載されていなかったが、蛍光灯100本、吊下げ型扇風機100台などが使える4500wくらいの容量のある180,000TK（201,366円）のIPSまでであると聞いている。この他に、ガソリンを燃料とする小型発電機も利用され、停電時、街にはエンジンの音が響く。ソーラーパネルも使われ始めている。IPSは村にも普及しは始めている。ドッキンチャムリア村では村出身者がIPSの店をダッカで開いたことから、752世帯で5～6世帯が一番安価なIPSを最近使用するようになったという。

私は計画停電の中に生活したが、不便さを強く感じなかった。蛍光灯の下で、ノートパソコンやプリンターは付属のリチウム電池で十分に2～3時間作動し、モバイル3Gモデムを使いパソコンの電力でインターネットへのアクセスが可能であったからだ。腰まきであるルンギーと半袖シャツという伝統的な服装で暮らせば、気温32度湿度90%でも吊下げ型扇風機で十分に過ごせる。人間は新しい環境に慣れていく力をもっていると信じよう。生活のリズムの中に計画停電を取り込めばよい。突然の停電は困るが、IPS、ソーラーパネルなどで準備をすすめれば、さほど計画停電を毛嫌いな話ではないのである。電気は無尽蔵ではない。この当たり前の事実を受け入れて電気を使っている開発途上国の人々の暮らしぶりに学ぶべきなのだ。バングラデシュ型の計画停電を受け入れて生活したとすると、単純計算で25%の電力需要を日々の生活で抑えることが可能だ。現在、日本の総発電量の約30%を原子力発電所に頼っているといわれる。しかし蓄電池の技術開発や、企業活動や列車などへの配電線の組みかえによる配電方式の工夫、ソーラーパネルの信号機や街灯への積極的利用、各企業、大学、研究所、役所などでの補助自家発電や蓄電の導入、作業工程や電気利用方法の見直しを徹底的に行えば、計画停電を活用することで原子力発電所を段階的に停止し、安全で持続的な社会生活を保障する生存基盤としての電力システムを構築することは決して夢物語ではない。バングラデシュの計画停電の経験がこのことを教えてくれている。

（注1）本稿を書くにあたって、バングラデシュのタンガイル県カリハティ郡ドッキンチャムリア村に事務所を構える村を活動拠点とするNGOであるJRDS（Joint Rural Development Sangstha）の代表者であるアッケル・アリさんに電話で確認した。

（注2）ANIK TELECOM

http://www.aniktelecom.com/product/price_list1.html